

◎自由発表（第2会場）【座長・司会】岡田 敏之（関西地区研究会常任幹事）

【演 題 等】「登校を目的化しない時代に、学校は不登校の子どもに何ができるのか」

～ASEBAによるアセスメントに基づく不登校・不適応の子どもへの対応～

【講演・発表者】泉佐野市立新池中学校 教諭 宮内 裕史

・発表概要

○不登校児童生徒数が過去最多を更新し続けており、「登校のみを目的としない」支援が求められている中、ASEBA（Achenbach System of Empirically Based Assessment：心理社会的な適応・不適応状態を包括的に評価するシステム）を活用したアセスメントに基づく支援の実践報告。

○従来の「子どもの失敗を待つ支援モデル（discrepancy（相違）モデル）」から脱却し、RTI（Response to Intervention）モデルに基づく3層構造の支援体制を導入し、子どもの心理社会的適応・不適応を可視化することにより、支援方針を立てて対応していくことを提案。

・発表要旨

○ASEBAの概要と活用

・ASEBA（アセスメントツール）は、子どもの心理社会的な適応・不適応状態を可視化するシステム。

- ・TRF（教師記入用チェックリスト）を活用し、子どもの行動や心理状態を多面的に評価。
- ・教師が複数名で記入することで、子どもの多様な側面を把握可能。
- ・ケース会議を通じて、支援方針を具体化。

○不登校対応の課題と支援モデル

- ・現在の支援モデル（discrepancy（相違）モデル）は、子どもの失敗を待つ形になりがち。
- ・RTIモデル（Response to Interventionモデル）を導入し、早期介入をめざす。
- ・支援体制を3層構造で整備し、段階的な支援を提供。

○事例紹介

事例1（支援学級在籍、欠席40日以上）

- ・攻撃的行動が目立つが、不安抑鬱に注目して支援を実施。
- ・クールダウンの方法を相談し、学習面でも伴走支援を継続。
- ・ASEBAの数値が改善し、子ども自身がソーシャルサポートを実感。

事例2（授業エスケープが目立つ）

- ・行動分析学（ABCフレーム）を活用し、行動を一つ一つ分析。
- ・教育的無視を適用し、望ましい行動に注目。
- ・キーパーソンの先生との関係が良好になり、行動が改善。

事例3（ほとんど登校できていない）

- ・引きこもりの項目が突出しており、登校刺激だけでは解決困難。
- ・家族（姉）を通じた関係構築を試み、終業式に教室に入る成果を確認。



・質疑応答の概要

Q 教師が子どもと接触できない場合のアセスメント方法は？

A 教師の見立てが難しい場合、多職種連携（福祉・医療 等）を活用したり、家庭や地域のリソースを活用したりして、支援体制を構築することが必要。

※ASEBAは心理・生物学的側面に重点を置いているため、家庭や学校風土の評価を補完する仕組みが必要。現在日本版の標準化が進行中であり、今後の適用に期待してい

る。また、学びの多様化が進む中、学校に来始めた子どもたちへのアセスメントが有効で、ASEBA を活用し、個別支援を強化する方向性が示唆された。

・ 記録者雑感

この発表は、不登校支援における実践的なアセスメントの活用と、教師の役割の再定義に関する非常に有意義な内容であった。特に ASEBA によるアセスメントは、子どもの状態の可視化だけでなく、教師の不全感の軽減にも寄与していることが示された。教師は「最も重要な環境」として、子どもを中心にチームで支援する体制が重要で、今後も教育現場での実践を通じて、すべての子どもを対象とした発達し自適生徒指導の充実のために、様々な支援の在り方を問い続けていくことが必要である。